

森崎和江の朝鮮経験と父・森崎庫次 —「朝鮮」という回路—

姜 文 姫

I はじめに

詩人であり記録文学作家の森崎和江は1927年朝鮮の大邱に生まれる。1944年進学のため渡日し福岡県女子専門学校（現・福岡女子大学）に通った。戦争の真最中だった時期であり、入学後間もなくして九州飛行機株式会社に学徒動員された。動員先とともに動員された九州大学の人たちとラジオから流れる「玉音放送」を聞いて敗戦を知った。そのまま終戦を迎えた森崎和江は「ふるさと」と呼べるものがなく、居場所のなさに気づく。その後森崎は1958年から九州の筑豊（中間市）に居を構え「サークル村」の運動を始めた。

森崎和江について近年の研究はサークル運動と炭鉱労働運動、女性史、流民など、多様なテーマに広がっている。大畑凜（2018年）¹の研究は森崎和江の「からゆきさん」を通して土から引き剥がされた流民（女抗夫、与論島民、閉山によって移動する若い労働者たち、沖縄、からゆきさん）たちの姿を追いかける森崎和江に焦点を当てている。2018年『現代詩手帖』²の誌面で「特集 森崎和江の詩と思想」が生まれ、上野千鶴子のインタビューでは森崎和江の展開してきた思想を女性運動との関連で位置づけ、井上洋子、坂口博、佐藤泉、結城正美、水溜真由美、田村元彦、綿野恵太、茶園梨加が今まで書かれた森崎和江の著書と運動をお産、炭鉱での聴き取り、言語論などのテーマで考察している。現在までの研究蓄積を踏まえながら、例えばお産の思想における様々な女性を論じている³など森崎和江に対する新たな読み方が試されている。

在朝日本人女性研究の中で森崎和江は「女性植民者二世」として位置付けられ、「女性植民者二世はどのような過程を経て内面化した植民地主義を克服し解体しようとするかという点」「女性植民者二世が植民地主義をどのように克服するか」⁴が論点になっている。森崎和江の朝鮮生まれ育ちという出自にフォーカスを当てた李秀烈（2018年）⁵とシン・スンモ（2018年）⁶は朝鮮に生まれ育ったことに対する森崎の認識を植民者二世の「罪意識」として定義しており、いわゆる「罪意識」を考え続けながら戦後を生きたと分析する。在朝日本人とその人たちの引

揚げ、引揚げ後の動向に関しては、その過程を体験した辛酸さと象徴される「公的記憶」を中心に研究が蓄積され、教育者・女性史・言論史においても研究がされている⁷。森崎和江は敗戦前の1944年に進学を目的に渡日しているため、引揚げを経由せずに植民地経験を語っていることから、「引揚げ者」とは異なる。森崎の戦後にも続く「罪意識」を論じるため戦前と戦後の連続性を設定したものの、引揚げ世代と呼ばれる他の人たちと区別されうる森崎和江独特の経験は十分に解明されていないといえる。

森崎和江の「朝鮮経験」は戦後の運動と思想を論じる上で重要視されてきたが、その朝鮮経験自体に関しては十分に明らかにされたわけではない。森崎和江と『サークル村』をはじめとする炭鉱のサークル運動を中心に据えた水溜真由美（2013年）⁸の研究は森崎和江の朝鮮経験を近代日本の問い直しという文脈で位置づけ、森崎和江が展開した理論と思想を明らかにしている。その視点は、森崎和江の朝鮮経験は戦後の日本に対する批判意識を可能にするものだと捉えながらも、森崎の思想や理論が朝鮮経験と父の影響を通じて形成されたと言及するのみにとどまっている。

『慶州は母の呼び声』を取り上げ、酒井直樹の帝国的国民主義という概念を用いて森崎和江が経験した朝鮮を理解しようとした松井理恵（2019年）⁹の研究は、森崎和江が「侵略」と「連帯」を同時に生きる「植民二世」と自称したことに着目し、日本の植民地体制の力学の問題までに視野を広げている。

大畑凜（2020年）¹⁰は森崎和江が1968年金嬉老事件の際に使った「人質」ということばから、森崎和江にとって「自由」の前提となる「近代的自我」が、個人においてのみ単独的に完結するのではなく金嬉老事件を契機に新たな「関係性」を含むものに展開していく過程が論じられている。その中では、森崎が父から受け継いだ「近代的自我」が森崎和江自身の思想の土台になっていたが、その思想を培ってきたのは植民地における近代であり、父が植民地教育者だったということが常に響いていたと論じられる。本稿はこのように森崎和江が長い間父・森崎庫次によって提示された「近代的自我」と「自由」というテーマを考え続けてきたという議論を踏えながら、父・森崎庫次を中心に朝鮮経験を具体的に検討したい。

戦後、森崎和江が近代日本における異族との接触を論じるときに、「秩序と共同感」に基づいた日本の「農村共同体」を批判しつつ、主要な問題群は主に父の話として書き込まれている。1970年代に書かれた訪韓記、朝鮮問題に触れた文章の多数には父・森崎庫次のことが記述されており、父が戦前に行ったことが戦後という時空間の中でもう一度振り返られている。森崎和江は父に直面せざるを得なくなる。それは「罪意識」のような既に自明なものではなく、父がなしたこ

とへの問いが投げられているのである。例えば森崎は家庭の教育方針は「自由放任」であったという。それは当時の朝鮮の日本人社会や内地では異例的な教育方針で、自分の子どもである森崎和江に対する家庭教育方針のみならず「植民地朝鮮の日本人教育者」であり続けた森崎庫次の側面を物語る。教育の方向性が皇国臣民への道とされた時期に朝鮮人生徒たちに我が家の歴史を書かせる一方、生徒たちの回想のなかで庫次は熱心な「天皇主義者」であった¹¹。韓国には家門の歴史（族譜）を記録して伝承することを重視する伝統がある。しかし森崎庫次が我が家の歴史を書かせたことは「族譜」作業とはその意味が異なる。後述するが、我が家の歴史を調べる、書くこと自体が「自己」（個）と「家」（集団）を分離することであり「皇国臣民の意識に逆行」するものだった可能性もある。父が植民地朝鮮における矛盾を抱えた存在であり、その矛盾を考えることが森崎の植民地経験の認識の独自性につながっている。つまり、森崎和江が戦後に父・森崎庫次を考えることは植民地主義の問い方への問いでもある。

したがって本稿では、朝鮮における生活のなかで当時は当然のように繰り広げられた大邱や慶州の時代的背景を「植民地支配」として戦後捉え返すときの媒介として父を軸にして森崎和江の朝鮮経験を検討する。森崎和江の朝鮮経験を記した著作『慶州は母の呼び声』（1984年）¹²を中心にしてその朝鮮経験が持つ独自性を明らかにしたあと、それが戦後いかなる形で問われているかを論じる。

Ⅱ 森崎和江の大邱と慶州経験

1. 「八十連隊のある町」大邱

森崎和江は1927年当時日本の植民地であった朝鮮の大邱府三笠町で生まれた。大邱は釜山の西北部に位置し、行政区域上では慶尚北道に属する。現在は韓国でソウルと釜山に続く第3の都市である。大邱に日本人が住み着き始めたのは19世紀末で居留民団が設置される時期は1904年であった。韓国併合（1910年）の前には居留日本人の行政業務を主管する理事庁が大邱にあったが併合後には理事庁が廃止され、行政単位が再編される¹³。それとともに大邱の居留民会も1914年3月をもって廃止された。

森崎和江が『慶州は母の呼び声』に書いている通り、大邱は軍隊と密接な関係を持つ場所であった。大邱は、日露戦争の開始に伴って一小隊が駐屯軍として置かれて以後、義兵運動の弾圧のための中心地となり、韓国併合後の1916年には歩兵第80連隊が置かれることになる。日露戦争後には神社、公園の建設が行われ、日本人人口の増加とともに日本人向けの各種の教育機関、町の中心部には道庁、府庁、法院、殖産銀行、憲兵隊本部などの植民地統治機関が集中していた¹⁴。

森崎が通った小学校（鳳山町小学校）の近くには兵営があり、森崎の弟が生まれてすぐ森崎家族が引っ越した家は陸軍官舎（「将校官舎」¹⁵）と隣り合わせであった。森崎は自分が暮らした町と軍隊が一緒にある風景を次のように書いた。

朝は八十連隊の営所から起床ラッパが風のまにまに住宅地までとどいた。ラッパの調子にあわせて子どもたちが歌った。(19)

八十連隊のある町。りんご園のある町。大邱はそのように言われていた。わたしの誕生は昭和二（一九二七）のこと。昭和の子どもという童謡のレコードを、小学校入学前に買ってもらった。「昭和の子どもよ、ほくたちは……行こうよ、行こう、足並みそろえ、タラララ……」というようなものだったが、やはりその頃の童謡の中に、スクラム組んで、ということばがあって、「スクラムって何？」と父にたずねた記憶がある。昭和の子どもは生まれながらにがっちり肩組んで、軍隊ふうに行進していくというイメージが誕生とともにあったのだ。男の子は大きくなったら軍人になると答えた。それは、昨今の子が大きくなったら煙草を吸うと思っているのと同じような、ごく自然な発想だった。わたしも、軍人や連隊は人の暮らしがあるかぎりあるものだと思っていた。（下線は引用者、以下同）(20)

軍隊に対するこのような感覚は植民地期一般の認識であるよりは、大邱という都市が持つ歴史から生まれる。『大邱府史』はその冒頭における大邱の沿革を次のように記している。

李氏朝鮮時代の後期は、三百年に垂とする対外的無事と、内部に於ける党争の繰返しとが積み重なって、沈殿不振を極めた。この後期を受けたる、ここに所謂末期は、李太王即位後、併合に至る約五十年間を指す。この期間は、併合後の新朝鮮が生れ出づる陣痛期ともいふべく、換言すれば半島に於ける日本勢力の樹立過程の期間であって、日本勢力が、明治二十七八年の日清戦役、三十七八年の日露戦役を二大転換期として進展したことは、ここに改めて言ふを要しない。我が大邱府についても同じことが言へる、即ち近代都市大邱への出発点は、かの日清・日露両戦役を期として、次第に増加した来住日本人によるところの大邱理事庁、ついで大邱居留民団の設立に在るのである。

大邱に来住した最初の日本人として知られているのは、李太王三〇年（二五五二）即ち明治二十六年九月、南門内の一家に医薬及び雑貨商を開い

た岡山県人膝付・室の二人である。兩人来住の翌年即ち明治二十七年八月には愈々日清戦争開かれ、大邱は南兵站線となり、両氏は共に軍隊に雇傭せられて通訳及び医務に當つた。戦役中わが大邱には常に二三個中隊の兵が駐屯し、且つ通過軍隊の数も多かつたので、右膝付の実兄膝付益吉（後の大邱覆審法院通訳官）を始めとして、日本人の来り店舗を開く者漸く増加し、同年末にはその数約十戸を算するに至つた。¹⁶

つまり大邱は、アジアにおける日本の勢力拡張・進出のための兵站基地として19世紀末に新たに誕生したということになる。李東勲（2019年）が「日清戦争時には軍隊駐屯の影響から、居留民が一時的に増加する時期を経て、一定の居留民が暮らしていた」¹⁷と書いているように、居留民と「軍」との密接な関係が分かる。盧溝橋事件勃発の際、大邱の人々は北支に向かう兵士を見送り、子どもたちすら銃後の役割を果たす。

盧溝橋事件はこれまでの度重なるシナ兵の妨害を、徹底的にやっつけるのですこし長引く様子だ、とのことで、七月の二十日過ぎに、八十連隊も出征した。軍旗を先頭に大勢の将兵が出征するのを、わたしら小学生も中央通りの朝鮮銀行の四つ角に全校生が整列して、見送った。日の丸の小旗をふり、万歳を叫ぶ中を、文子ちゃん〔森崎和江の級友－引用者〕のおとうさんも馬に乗って駅へ向かった。その他幾人もの友だちのおとうさんが出征し、第三小学校〔鳳山町小学校－引用者〕ではすぐに慰問文を書き慰問袋をこしらえて送った。（101）

連隊が駐屯するということは森崎と他の在朝日本人たちによっては当たり前のこととして考えられた。「軍旗祭」のときは朝鮮人と日本人を問わず、みんな連隊の兵営のなかで桜の下で飲み食い、演芸場ではレコードがかけられどじょうすくいまでも披露されるなど（80～81）、軍と民間人は常に共存していた。森崎和江と同じ1927年朝鮮生まれである小林勝の植民地経験について論じた原佑介（2019年）の研究では、大邱における軍隊と民間人の関係性は学校も兵営と物理的に至近距離にあり学校の教育や文化も不可分の関係であったと論じられている。¹⁸

同時に、日本人と朝鮮人以外にシナ人、ロシア人も珍しくない風景も書いている。それぞれの民族がことばと文化が異なっても「花が幾種類も一緒に咲くように自然なこと」（25）だったと感じる一方、それはあくまでこの地が戦勝国の軍隊に占領されている状態を想定するものであった。

「ロシア、ヤバンコク、クロパトキン、キンノタマ」

みんなで言って、キンノタマでははと笑う。クロパトキンとは日露戦争の折の敵国将軍だというくらいの知識であった。「ロシヤ」ということばは生活感がともなっていた。ロシア人もよく見かけたし、そのくには地続きなのだといつしか知っていたから。

「白いは兎、兎ははねる、はねるは蛙、蛙は青い、青いはチャンコロ、チャンコロは逃げる」

そう言っでは追っかけたり逃げたりが始まる。チャンコロとは清国、つまりチャンコクのなまりだろう。が、「泣いて逃げるはチャンチャン坊主」と泣く子をはやしたりもした。(58)

様々な人が共存するのは当たり前のこと、自然のようなことであったが、子どもたちは気づかず彼らへの純真無垢な「差別」も日常の中で同時に行っていた。つまり、森崎が暮らしていた当時朝鮮での生活は日清戦争と日露戦争に地続きであったといえるだろう。その地続きの中に自分らが「日本人」だという認識を共有するようになる。しかし朝鮮人に対する森崎和江の接し方は、同年代の日本人に比べ少し違った。父の庫次には「これからの日本は教員と警察官にちゃんとした考えの人が集まらないとたいへんなことになるんだよ。朝鮮人に対してヨボなんて言うお友だちがいたら、よくないことばだって教えてあげなさい」と言われるほど、日常的差別と蔑視には違和感を持っていた。これには父が朝鮮に来て初めて教鞭を執った学校が朝鮮人生徒のための学校であったこともあるが、父は朝鮮人生徒たちに注意深く配慮していた。少なくとも森崎和江の記述を通じて見える父は彼らが置かれている状況を精一杯理解しようとし、彼らの可能性を見ていた。

2. 「王陵」の古都、慶州そして金泉へ

森崎一家は1938年大邱から慶州に引っ越す。父の転勤によるものであった。森崎の父は1938年から1942年まで「慶州中学校」—正式名称は「慶州公立中学校」(現・慶州高等学校)—の校長として赴任する。森崎は父の赴任について家族の会話を記している。慶州中学校は慶州の由緒ある家門である「慶州李氏」がつくる学校で、「おとうちゃんは李さんのお手伝いをして県庁や総督府に何度も行った」(107)と書かれているように森崎庫次は朝鮮人のヤンバン(両班)たちとも繋がりを持っていたと思われる。

それは冬休み明けの、川の氷もゆるみそうな晴れた日のことだった。客間から声が洩れて、「四十歳そこそこで校長など……」と客が母に挨拶した。な

んのことかなと一瞬思ったがすぐに忘れた。(中略)

「すぐすむから待っていただきなさい。

健一は鳳山町小学校に入学するのをたのしみにしているけれど、こんどおとうちゃんの仕事でよその町に行くことになったよ」

「どこに！」

わたしたちはすぐに父のもとに集まった。

「慶州」

「どうするの、ぼく」

「おねえちゃんたちと同じ学校に行けるよ。

和江も節子も学校が変わるのはいやだろうけれど、がまんしてくれないか」

「転校！」

わたしたちはざわついた。「転校なんていやあよ」などと言ったが、やがて「いいよ、平気よ」と落ち着いた。

「慶州中学校は今から出来る中学校でまだ校舎もないんだよ。おとうちゃんはその校長先生」

「学校がないのに、どうして校長先生？」

弟が聞いた。

「慶州は朝鮮が昔新羅と言っていた頃の都だ。内地の奈良のように古い都。そこに李奎寅さんという立派なお年寄りがおられる。慶州李氏とって、平氏とか源氏とかというのと同じ、古くからの名門氏族がある。そのお一人だ。そのおじいさんが李氏一門の学校を建てようとなさった」

「ご自分たちの一門の学校をですか」

母が驚いた。

「そうだ。以前は書堂とか書院とかいって、一門の子弟を教育する寺小屋ふうの学校をヤンバンたちは持っていた。が、子弟教育をより広い教育の場にと考えられたんだ。それが慶州中学校の基礎になったんだよ」

ふうん、とわたしは言った。

「李さんは秀峯という雅号を持った教養のある方だ。李秀峯さんが校主の私立学校をようやく総督府が許可した。おとうちゃんは李さんのお手伝いをして県庁や総督府に何度も行った。公立並の中学とするように」

「そうになりましたのですか」

「まあやってみろ、と言うことになった。校主が李秀峯さん、理事長がその息子の李採雨さん、そしてぼくに校長をやれとのことで、朝鮮人も内地人も通学する公立中学校として発足することになった」(105～107)

父・庫次の話している内容によると慶州中学校は私立学校として認可を取得しようとしたが公立になったということである。そして父は学校の認可を得るために尽力したことがわかる。

しかし、父の赴任に関する記述はその前後の文脈を一緒に検討しなければならない。森崎はこのエピソードの前後に当時朝鮮人青年に対して設けられた「志願兵制度」に触れていて、植民地当局が日本人と朝鮮人の共学を図ったことの意味を書いている。それは学校を朝鮮人だけの「民族私学」にはさせない、戦争真っ最中の日本帝国にとっては政治・軍事的意図に沿うものであった。また森崎は学校の創立者の理念と父が唱える理念が通っているという、父の理想に対しては冷静な態度で一貫する。それを克明に物語るのが、創立者李秀峯¹⁹の息子である李採雨の態度であった。森崎は父に対する彼の「他の人には見られぬ対立的なまなざし」を敏感に感じ取る。

李秀峯氏はわたしたちが慶州に移る前後に亡くなられたように思う。わたしはお目にかかる折を持たなかった。そしてその子息の採雨氏とは同じ村の住民のようにしばしば会ったし、また行楽の伴をした。海釣りにも連れて行ってもらい、舟の中で釣り上げた魚を食べてよろこんだ。採雨氏の子息たちもやがて中学へ進学した。李採雨さんは背広の着こなしも鮮やかな近代的紳士だった。痲痺も強そうな四十歳前後で背が高い。初めて会った時、この方は父を警戒しておられると思った。他の人には見られぬ対立的なまなざしに、李氏一族のおさえかねる思いを感じた。(109～110)

李採雨のまなざしは在朝日本人に対する朝鮮人の一般的な態度とは言い難いが、おそらく善意を持った日本人の力を借りずでは朝鮮人のみで学校を建てることさえ不可能な状況がわかる。慶州中学校の認可はなかなかもらえなく、学校設立のための財産は学校を公立にしないと慶州が属する慶尚北道に寄付するようにすすめられた²⁰。また学校の中に奉安殿が建ち天皇の御真影を設置して、登校時には必ず拝むことを強制された。

李秀峯は満州事変、日中戦争など1930年代入っての情勢によってことごとく教育が奪われた民族のため教育機関を設立しようとしたのである。つまり、慶州中学校が目指していたのは朝鮮人のための教育であり、私立として認可を求めている理由もそれにあった。ところが、慶州中学校は総督府の方針と道当局によって「私立」ではなく「公立」として設立された²¹ものであり、開校時の教科過程を見ても第1学年から第5学年まで修身科目が全学年共通で時数1、一番多い時数は6～8の「歴史・漢文」と時数3～4の「歴史・地理」であった。「歴史・漢文」

は国語購読を含めており、「歴史・地理」には国史（日本史）と日本地理から始まって東洋史と西洋史、外国地理になっていく²²。慶州中学校の認可は2年余りもかかり、1938年3月21日には「慶州公立普通高等学校」として認可を得るが、それから間もない1938年4月1日の第3次教育令により校名は「慶州中学校」となる²³。慶州中学校は創立して最初年の生徒数が、日本人2名に朝鮮人が53名²⁴であった。やむを得ず日本人と朝鮮人の共学として出発したが、実態としては朝鮮人が多かった。

まとめると父は慶州中学校の設立に尽力し、特に総督府に対する対応を任せられたと考えることができる。学校設立の申し出から認可までは2年4カ月が費やされたが、その過程は私立としての認可を認めない総督府学務局との闘いと交渉であったわけである。慶州中学校の50周年記念誌『秀峰学園史』による関連記述に森崎庫次の名前は見つからなく、森崎庫次の役割が具体的にどのような役割だったかは分からない。李採雨の態度からは、学校が設立し開校したものの日本人に頼らざるを得ない状況だったか、あるいはその過程において李家家門の開校運動推進者たちには不利な条件をつけて設立を進んだかが推測できるのみである。

父・庫次は1938年～1942年まで慶州中学校で校長を務めていたが、急に金泉中学校への転任が決まる。この転任は単なる出来事ではなく、追い詰められた父の状況を表していることである。

「おかあさんが亡くなられてさみしくなつたろう。すこしは落ち着きましたか」
校長先生はためらう風情だったが、「おとうさんとも話したのだが」と言って、
「おとうさんがこんど金泉中学校に転任されることになった」
と言われた。

「え？」

わたしは帰省の時にはなんの話もなかったことを思った。二七日の仏事も終わりやっとな新学級の学校に戻って、父はまた厳しいが、しかしその心を汲んでくれる先生や生徒のいる職場で傷心に耐えてもいようと思っていたのだ。父ははた目にも痛々しかった。魂の火は体内で消えたかにみえた。

どういふことなんでしょう。何があつたのしょう。わたしは父が「おとうちゃん
は前と後ろから銃を向けられている……」と言つたことを思い出しながら、
校長先生を見つめた。(177～178)

下線の部分は、森崎和江が大邱高等女学校に通い始め、週末に下宿先から家に帰ると父がつぶやいたことばを指している。これについて森崎は、父が受けただろうと思われる厳しい視線を推測している。そこには父が教えている学校で「日

本人教育者」としていかなる人だったかは分からないが、彼が心を屈折しながら向き合わざるを得なかった複雑な状況が描かれるのである。

父の金泉への転任はこうした圧力によるものであったと考えてもよいだろう。森崎和江の記憶に庫次はよく朝鮮人生徒、日本人軍人の将校などと家の座敷で話をしてきた。それは2・26事件に際してもそして学校内で朝鮮人生徒たちによる朝鮮独立運動などであった²⁵。朝鮮人生徒たちとそのような日常的な付き合いがあったことも、影響していたと考えられる。

このことは、それから約25年経った戦後に再び呼び戻されることになる。1968年森崎和江は、慶州中学校の学校創立30周年記念式典に招かれて亡くなった父・庫次に代わって出席した。これは森崎和江にとって戦後初めての訪韓であった。この招きの意味は他でもなく36年という植民地下を生きた人々がその痛みと記憶が交差する時間を振り返り、踏み切ったものであった。森崎にとっては自分を養ってくれたオモニ（母）たちに会いたいと思う一方、亡父の霊とともにする旅立ちであった。この訪韓は大きく慶州中学校と父、そして父が大切にかわいがっていた一人の青年の村を訪ねる二つの軸においてなされた。

Ⅲ戦後の邂逅：父と「朝鮮」、「自由放任」教育

1944年、森崎和江は進学のため福岡に単身で渡る。この渡日は実は敗戦の色が濃くなり、朝鮮の日本人教育者として追い詰められていた父の判断のもとで行われた。続いて父と妹、弟も渡日する。森崎はその後結核で療養、結婚と出産、父と弟の死、1950年代後半からサークル運動という時間を過ごす。1968年には日本に来た以来、初めて韓国を訪れることになる。

亡くなった父の代わりに参加した慶州中学校の創立30周年記念の式典は、韓国ではなく「朝鮮」との向き合いであった。今の韓国が植民地「朝鮮」であったこと、植民地である地に暮らした朝鮮人と日本人との関係性が再び思い出される。慶州中学校卒業生の人との出会いと会話²⁶は、現在の韓国の文化・政治などについて話しながらもそれのもとになる認識は「あの頃」ということばの中からである。彼らは朝鮮人と日本人であった上に、軍隊に行かなければならなかった（または行くことを予定されていた）朝鮮人男子と、そうではない日本人女子との認識の差を確認しあう。森崎和江は父を通して知り合った人々から“日本人である”ことを問われる。ふたつの国語を用いた人間がそれから抜けるすべはないかという問いかけから始まる会話は森崎自身への問いかけでもあり、それは森崎和江に自分が朝鮮の生まれ育ちでありながら元在朝日本人として暮らしたことを喚起させる。このことには亡くなった父・森崎庫次が関わっている。

わたしは亡父の書斎によばれて、父から、いつ万一自分がどのような災難に出逢おうとも父を信じて生きよといわれたことをちらと思い出したりした。思えば暗い月日であった。緊張した精神だけが華麗さを感じさせる、そんな頃であった。新羅の古都で、父は、近年のわたしが炭鉱町で労働者に接している時間の緊迫などとは比較にならぬ密度で、彼ら少年に接していた。あの地に建立された彼らの中学は朝鮮民族の私立学校であるはずであった。そこへ四十代へ至らんとする亡父が公立中学校長の任を負って赴任していった。わたしら家族はまるごと朝鮮人青少年との交流を行いはじめた。わたしは彼らによって育てられるべく、彼らの内面へむかって父から放たれていたのである。²⁷



初代 森崎庫次(中)
(1938.4.1)

図 1

出典：「歴代校長」『秀峯学園五十年史』秀峯学園五十年史編纂委員会、1988年

父は私に「朝鮮人はすぐれた人々だ。もし軽んずるようなところが起こったら恥じよ」と言っていたが、子供の私にはことさら軽んずるほどの出来ごとは起こらなかった。それよりも朝鮮人シナ人を特別に意識せずとも生活圏がちがう者だという決定的な感情でもってくらしていたのだ。

そんな私の幼時の記憶には、朝鮮人学生が暴動を起こしたり、日本人教師を袋だたきにしたり、運動会を機会に反日を叫んだり、という時の会話がのこっているのである。²⁸

森崎和江は父を通して朝鮮人の少年たちと交流し、父を通して彼らが置かれた植民地下という状況を読み取った。引用のような、森崎庫次に対しても反日をする生徒がいなかったとは言えないのである。慶州中学校の校長であった森崎庫次はいかなる人で、当時の生徒たちの眼にはいかなる教育者に映っていたか。

森崎庫次（1897年～1952年）²⁹は福岡県三潞郡青木村浮島（現・久留米市）出身で、1916年早稲田大学史学及社会学科に入学、1920年首席で卒業する。彼は元々卒業後にドイツ留学を予定していて、帰国したら大原社会問題研究所に行くことも決まっていた³⁰。しかし森崎和江には伯父に当たる庫次の兄が家の財産を芸者遊びなどで使いつぶしてしまったため、庫次は留学を断念し早速就職ができる道を探して安部磯雄の助力で栃木県立栃木中学に赴任、その後は朝鮮に渡る³¹。庫次は教育者養成のため作られた朝鮮の師範学校の出身でもなく、植民地期を通して行われた「内地から」の招聘教員³²でもなかった。ただ公務員の給料が内地に

比べて6割高い³³との理由であった。

慶州中学校の50周年誌『秀峯學園五十年史』³⁴には、教育者としての森崎庫次に関して書かれている。この学園史において森崎庫次の名前は学園の歴史記述の中にも生徒たちの回顧にも登場する。最初に名前が出るのは、「新羅の古都である慶州の誇り高い遺物を大切にす国民になりなさいと日人の初代校長の森崎氏が言うほどであった。子どもたちがご先祖様の墓の上で遊んでいたのは良識ある日人校長の眼にも情けなく見えたはずである」³⁵と書いている。続いては「第2章 日帝治下の秀峯學園」において森崎庫次は校長でありながら修身科目を自ら教えたという。その修身の時間に森崎庫次は「報恩」「廉恥」「精進」という三つの校訓を訓示し、その後は必ず「海ゆかば」を合唱させた。

そして毎日終礼の時、「海ゆかば」という、天皇に命をささげて忠誠を尽くす歌とともに〔校訓を一引用者〕暗唱するようにした。森崎校長は天皇に大変忠誠たる人物であって、天皇について語るときはひたすら畏まって涙を流すばかりであったという。彼が制定した校訓にもそのような心得が表れている。彼は韓民族を皇民化するため修身教育を自ら担当するほど積極的であって、おそらく韓民族が幸せになる道は徹底的に皇民になることだと信じ込んだようである。³⁶

これは森崎和江が書いた、朝鮮人を軽んずることを警戒して朝鮮人生徒たちと交流する父の姿からは想像しがたい姿である。皇民化教育というまでもなく植民地化政策を成り立たせる重要な要因であったからである。

卒業生たちが寄せた回顧録には、森崎庫次という人物像がより明確に見える文章がある。学園史が刊行される時点で慶州高等学校の校長を務めていた權五燦クワンオチャンは「同門初代校長が創學初代校長について考える」の中で次のように書いている。

あの方は日本史を専攻した徹底した国粹主義者であった。(中略)とにかくあの方は、日本の統治理念とも言える皇道主義に徹底し、植民地に派遣された教育者としてはほぼ完璧に近いと言えるだろう。しかしそのような点はさておきにして、教育者としても立派だったし僕が夢見る校長学(?)の教材として思い出してみることがよくある。³⁷

1942年だと、アジア太平洋戦争が激しくなりつつある時期であった。いわゆる大本営発表には戦果が積み重なり街には勝利を謳歌するばかりだった。しかし識者層ではもう、「ミッドウェー海戦」の敗北後、戦局が陰しくなっ

て日本の前途には暗雲が低迷していつていることを承知していた。こんな時に日本は「ガダルカナル島」からの撤収を発表した。もちろん「作戦上の必要により」という条件付きの発表だった。この発表が出されたら森崎校長はすぐに全校生を講堂に集結させた。そして大本營の発表を伝えたが、その声は悲痛でとても暗澹たる顔だった。「天皇陛下の聖慮はどういうものだったるか……」と言い、涙を流した。

(中略)

チフスで兄弟を失った生徒に対する弔事の挨拶としてはあまりにもひどすぎるので、崔律〔慶州中学校の第一回入学生－引用者〕が泣きながら校長室に訴えたら、森崎校長は崔律に謝った後その担任の先生を厳しく叱った。「そんな精神で一体どうやって一視同仁の聖旨を打ち出すことができるか!」というものだった。皇道主義教育者の面目が躍如としているが、あの方の人間味もうかがえる。

体調が悪くて作業を休んでいる生徒のおでこにご自身のおでこを当てては、「熱があるから休んだ方がいいね」と優しく慰めてくれたあの方に民族的差別はなかったはずだと信じたい。³⁸

このような記述から森崎庫次は、徹底した国粹主義者・皇道主義者でありながら同時に人間味が溢れて「民族的差別」はしない優しい人物として回顧されている。彼と交流した朝鮮人生徒たちがその態度をどのように受け止めていたかについては、戦後行われた森崎和江と彼らの会話から読み取ることが難しい。しかしそれは森崎和江が父への問いのなかで振り返られていた。父に身に付きまとう切迫していた妙な雰囲気から森崎和江は父の「自由放任」の意味を繰り出そうとした。小学校時代に家庭内での教育方針について調べる宿題を出されたとき、父は「自由放任」と書く。

「自由とは和江が正しいと思ったことはのびのびとやり通すことをいう。放任とは親からいえば責任を手放すこと、和江の立場からいえば責任を引き受けること。わかったね」

「わかった。どうもありがとう」

わたしはとてもうれしかった。信じてくれているのだ、と思った。早川のおじちゃんと父が、時々、自由について話しているのを知っていた。襖の中から洩れていた。

が、この調査用紙を先生に渡すと、顔色がかわった。きびしい表情でわたしを見た。わたしは平気だった。自由放任はわたしの宝物になっていたから。(84)

森崎和江は満州事変と満州国建国辺り、言い換えると1930年代初頭の記憶はないが「二・二六事件」(1936年)「盧溝橋事件」(1937年)「ノモンハン事件」(1939年)は記憶があるという。特に「盧溝橋事件」は町全体が兵士を送り出した記憶、銃後としての務めなどの記憶も鮮やかである。そのような雰囲気のある時期にあった出来事として記述されるのが父の家庭教育方針である。

「自由」ということばの響きとそれが当時植民地朝鮮の在朝日本人児童に対する教育において、しかも日中戦争期に持つ意味とは、それを受け取った学校の先生の反応からよく分かる。先生は厳しい態度をとり、家庭訪問から外して、森崎家の家庭教育はよくないと森崎和江に差別をする。先生が他の子どもに言った言葉を借りれば当時の教育で「自由」とは「従順でない」「率直でない」と同様である。「赤い思想」(86)であった³⁹。

朝鮮に於いて1911・1922・1938年の3次にわたって行われた教育令改正は、第1次の際には朝鮮人に限定してであったが第2次・3次は在朝日本人を含めてであり、内地と同様な教育制度下に定めるものであった。第3次のみならず第1～2次教育令の時期(1911～1937)においても、朝鮮人には支配言語を理解する程度の識字と言語能力が要求され、民族的序列化構築を図る教育が行われた⁴⁰。

しかし森崎和江が学校で毎朝「皇国臣民ノ誓詞」(1937年発布)を唱えることを書き、それを「わたしは皇国臣民の自覚は薄かったと思う」「どちらかといえば内地と切れていることを、自由のひとつと考えていた」(139)と言った時、その「自由」の意味をどこまで解釈したのかは問わなければならない。次のように大陸進出・戦争によって拡張されていく空間を依然として全部日本の空間として考えることは意味深い。

わたしは日本地図を描くのは得意だった。朝鮮半島は地図を見ないで書けた。北の樺太から北海道・千島列島・本州・四国・九州・奄美諸島と沖縄、台湾。朝鮮の北に満州国がある。これは日本ではないが、友好深い国である。満州国皇帝と日本の関東軍とで統治している。それから旅順・大連のある関東州は日本の領有地である。また沖縄の南に赤道がひろがっている南洋群島も委託統治領だ。南洋群島にはマリアナ群島、マーシャル群島、カロリン群島、パラオ諸島などがある。この中のグアム島はアメリカ領だ。わたしは自分の机でこれらの地図を描きつつ、日本に接しているフィリッピンやニューギニアを空想した。ニューギニアは南半球なのだ。その南半球に接続するまで、日本の国はひろがっている。土地は狭いが日本は空間はひろいのだ。こんなに南で向けてひろいのに、なぜノモンハンなんかでソヴィエトなどと戦争を

するのよ、と、のどかな慶州の子ども部屋で不服であった。(131～132)

「自由放任」という教育方針を自分の宝物にし、天皇と象徴される植民地支配からの自由を目指したとはいえ、その自由が発揮されうる範囲はさほど広くはなかったし、また幼年期の森崎和江本人も狭く認識していたといえるだろう。

IV おわりに

これまで森崎和江が書いた朝鮮経験についての記述と戦後の文章を取り上げて、父・森崎庫次が自分を屈折しながら過ごした「朝鮮」とその時間への問いかけを検討した。森崎和江は軍隊がある町・大邱で戦争を実感し銃後を経験するが、在朝日本人の朝鮮人への日常的差別に違和感を持つ。他の日本人と自分の違いに気づく。父の転任地である慶州では「前と後ろから銃を向けられている」父から漂われている切羽詰まった雰囲気を感じ取ることができた。

慶州中学校の創立30周年記念式典への参加をきっかけに森崎和江は戦後初の訪韓を遂げるが、その旅程は森崎和江自身が「朝鮮」と向き合う時間であった。韓国で父・森崎庫次の残したものと直面し父へ問いかける。

森崎は1968年朝鮮について書いた二つの文章を「朝鮮について語ることは重たい」(「わたしのかお」、「二つのことば・二つのところ」)と始めている。戦後、韓国への旅は「朝鮮コンプレックスの是正への、こころ重たい出発である。しかし、それは果たして是正しうるものなのか。是正とは何なのか。」⁴¹と問いかけている。森崎は誰にも告げず、一つの村を訪ねる。それは父が愛した青年の村であり、いまはその妻である女性に会うためであった。

とはいうものの、彼らは父との出逢いがなくともそのような人生を送ったろう。父は植民地政策下の日本の庶民にすぎないのだから。しかし私には、支配権力の植民地主義の罪業と同様に、日本人庶民の生活様式の罪がこころにかかる。生活の場での異民族との交流がどのような原則のうえで行われたか、それが日本在住の民衆の意識の何とどう関連しているのか、その民衆の意識と支配権力の支配の原理とはどういう補足関係にあるか。そこまでみきわめねば、日本のアジア侵略の悪(それをひき起こした日本の民族的特性、その内的必然性)をこえる思想は、日本民衆の生活意識のなかに生まれえないのだ。⁴²

このような記述からも分かるように、森崎は父が意識して朝鮮人を重んずることと皇道主義者であることを分けて振舞ったとは思っていない。その原因はもっ

と根本的なところにあるという。森崎庫次は朝鮮人青年たちと親密な関係にあり、朝鮮独立運動に関して朝鮮人青年たちと議論したくらいである。このような関係の中で教育者としての森崎庫次は彼らの精神の形成にも影響を及ぼす。森崎は初訪韓の際に父・森崎庫次の教育を通じて植民地時代を生きた韓国人の人々と対話するが、その中に一人は「機械的に日本語を使ってきたわけではない」といい、「わたしは魂のもっとも深い所でわたしの精神の形成にかかわったのが、ほかならぬあなたのおとうさんであったことをくやんではいません。こうしてあなたと話していて、わたしはあなた以上に彼を理解しているのではないかとすら感じます。わたしには日本の敗戦後のあなたのおとうさんの苦痛が感じとれる」という。森崎和江はそれにより彼らと森崎庫次の間に存在する共通の感覚を見つける。彼らと森崎庫次は植民地時代を生きるいわゆる「植民者」と「被植民者」との対立関係ではなく、植民地支配下にあった状況への理解とその支配関係が解消された後も続く悩みが共有できたといえる。そのような関係が森崎和江にはなかったこと、しかし長く自分を苦しめてきた「植民地朝鮮の生まれ育ち」という出自がわだかまりになっていることは、戦後出会う複数の人たちとの関わりの中で再び呼び起こされる。それを書き留めることが森崎和江にとっては問いかけ方であったといえる。

森崎和江は父の教え子であった人が書いた文章を読んで、父が慶州中学校にいた時期の後半—戦争末期—に生徒たちに我が家の歴史を書かせたことをやっと知る。

たたかいは激烈になり、負けはじめたある日父の書齋に行くと、放心していた父はふと私をみとめ、そのあたりの書齋をさし、とうとう**ほくも国民精神の本と買いかえねばならなくなった、きみはどんなものをもっている？**といった。そのころのことである。ちょうど私と同年配の朝鮮人の少年らに、我が家の歴史を書かせたのは。⁴³

森崎庫次は敗戦が近い頃に、集団に優先する個人を「国民精神」に求めていた。子どもには家系・縁者と接することをさせない、また慣習的な「女」の生き方にならないよう、森崎和江を育てた。つまり朝鮮と日本の「家」から「個」（「個人」）を引き剥がすことによって「両民族の無権力者が自己を確立するとともに民族的調和へ到達」⁴⁴する可能性を見つけたのである。

森崎和江にとって「朝鮮」と朝鮮経験を語ることは、森崎和江にとって重要な場所である筑豊につながるための手掛かりであった。森崎和江は『サークル村』に関わりながら一方では炭鉱の坑内労働をした老女たちを訪ねて彼女らの話を聞

いた（森崎和江『まっくら』理論社、1961年）。それは森崎が「家」という枠の中での労働を拒否した「主婦」（同じように「炭婦協」「母」なども）という名を返上して「無名」を取り戻そうとした追求の産物でもある。そして森崎が1950年代末から1960年代はじめにかけて大正炭鉱の争議の場において、その場を通じて運動の「組織」と「性」の関係性を問うこと、そして「同化」に基づいて行われた植民地政策のみならず民衆の次元でなされた「共同体認識」への問いにつながるといえる。

森崎は1960年代を総括するような形で1970年に大正炭鉱のことを書いた『闘いとエロス』⁴⁵において、二人の男女を中心にして炭鉱争議について物語を展開しながら『サークル村』と『無名通信』、「大正行動隊」を経由する。森崎は争議の最中に起こった強姦殺人事件を取り上げ、組織は「行動力をもつリーダーで「サークル村」解体後のヤマを引きしめていた」（159）兄のその後の死は悲しむが殺害された女性の死は組織の付き物のような扱いされることを批判する。「性と集団のかかわりぐあい」（159）に無関心な組織・集団、男たちをみる。そして男たちにおいて少女の死が「思想の空洞」になっていることに気づく。彼女は「性」の言語化、ここでは「思想化」を求めて男たちに尋ねるが彼らからその言葉は見つからない。このように森崎和江が本全体を通して問うているのは、「組織」と「性」の関係であり、その問いは単に両者を対立するものとしてではなく、組織・集団性の在り方に向かっているといえる。そして問いのあげくに彼女は突然「朝鮮」を探し出す。これからの方向性について聞かれた彼女は「朝鮮語の勉強」をはじめたと答える。「朝鮮」を探さない限り「組織」も「性」もイメージだけであり、柔らかいままであるという⁴⁶。

本稿では森崎和江の父・森崎庫次に注目することによって、森崎和江の朝鮮経験と戦後サークル運動と聞き書きなどとして繰り広げた思想と理論、営みをつなげようとした。渡日という出来事を境目にして森崎和江の置かれた風土、環境は一変するが、その結節点を作ったといえる朝鮮での時間は戦後の時間とまったくつながる必要があるように思う。森崎和江は戦後という時空間の中で自分の「朝鮮」を引き出しから出し、思想と理論、営みを展開していった。炭鉱での労働者・失業者問題に取り掛かる森崎和江がその問題と「朝鮮」をどのようにつなげていたかについては今後の課題にしたい。

注

- 1 大畑凜「流民のアジア体験と「ふるさと」という幻想：森崎和江『からゆきさん』からみえるもの」『女性学研究』25、2018.
- 2 「特集Ⅱ 森崎和江の詩と思想」『現代詩手帖』思潮社、2018.9.
- 3 茶園梨加「「産」の思想を考える」『特集Ⅱ 森崎和江の詩と思想』『現代詩手帖』思潮社、2018.9.
- 4 広瀬玲子『帝国に生きた少女たち：京城第一公立高等女学校生の植民地経験』（大月書店、2019）.
- 5 李秀烈「朝鮮植民二世の意識構造—植民二世出身作家を中心に」、『21世紀東アジア社会学』第9号、2018.
- 6 신승모『재조일본인2세의 문학과 아이덴티티』아연출판부、2018〔シン・スンモ『在朝日本人二世の文学とアイデンティティ』亜研出版部、2018〕.
- 7 이형식「재조일본인 연구의 현황과 과제」이형식 편저『제국과 식민지의 주변인—재조일본인의 역사적 전개—』보고사、2013년〔李炯植「在朝日本人研究の現況と課題」李炯植編著『帝国と植民地の周辺人—在朝日本人の歴史的展開』ポゴ社、2013〕.
- 8 水溜真由美『「サークル村」と森崎和江—交流と連帯のヴィジョン』（ナカニシヤ出版、2013）.
- 9 松井理恵「植民地朝鮮とは何か—森崎和江『慶州は母の呼び声』をテキストとして」『理論と動態』11、2019.
- 10 大畑凜「人質の思想：森崎和江における筑豊時代と「自由」をめぐる」『社会思想史研究』社会思想史学会年報44、藤原書店、2020.
- 11 慶州中学校の卒業生の回顧によるものである。
- 12 森崎和江『慶州は母の呼び声』（新潮社、1984）。以下この著書からの引用は（ ）の中に該当する頁数を入れることにする。
- 13 居留民団体の変遷については李東勲（2019）の「第2章 居留民団体の変容と在朝日本人社会の「自治」」に詳しい。
- 14 植民地都市としての大邱に関しては太田修「戦時期大邱の朝鮮人女子学生の学校生活」（韓哲昊・原田敬一・金信在・太田修『植民地朝鮮の日常を問う 第2回佛教大学・東国大学校共同研究』思文閣出版、2012）を参考にした。
- 15 大邱府編『昭和7年11月末現在 大邱府全図』（縮尺1:10000、1932）上の名称。
- 16 大邱府『大邱府史』（1943年）、187~188。旧字は現代字に改めた。
- 17 李東勲『在朝日本人社会の形成』（明石書店、2019）、46。
- 18 原佑介『禁じられた郷愁—小林勝の戦後文学と朝鮮』（新幹社、2019）、324；稲葉継雄「大邱中学校について「在朝鮮「内地人」学校の事例研究」、『九州大学大学院教育学研究紀要』第10号、2007。
- 19 『朝鮮中央日報』の1936年7月29日朝刊（ハングル）には「故李奎寅翁追悼式舉行」という見出しの記事がある。記事の日本語訳は次のようである。「古代文化の都市なる慶州に新文化の機関を建設しようと巨大な金額を投じ慶州高等普通学校の基金を作り、その事業が完成を見る前すでに故人になってしまった故秀峯・李奎寅氏の追悼式が昨二十七日午前十一時に大邱公会堂にて盛大に挙行されたという。」翻訳は引用者による。韓国史データベース（<http://db.history.go.kr/>）より。
- 20 秀峯學園五十年史編纂委員會『秀峯學園五十年史』（1988年）、127。
- 21 「慶州私立高普校 認可不許を言明」『東亜日報』1937年7月4日。
- 22 『秀峯學園五十年史』、136~137。
- 23 秀峯學園五十年史によると、設立認可をもらう時の名称は「慶州公立高等普通学校」であったがこの名称で呼ばれたのは学校設立推進運動中と開校してのたった5日間であった。実際に開校した際の校名は「慶州中学校」であったという。前掲書、131。

- 24 1938年刊行された『朝鮮諸学校一覧』には、公立の中学校が37校、私立が13校であり、生徒の数は公立に日本人が7,954名、朝鮮人が10,317名、私立は朝鮮人のみ7,551名とある。慶州公立中学校の教員は日本人が3名に朝鮮人が1名である。原文に日本人は「内」、朝鮮人は「鮮」と表記されている。また昭和14年から17年までの日本人・朝鮮人の生徒の比率をみても、日本人生徒9名、15名、23名、27名に対して朝鮮人生徒は101名、144名、189名、234名である。朝鮮総督府学務局『朝鮮諸学校一覧 昭和13年』1, 103~104; 古川昭『大邱の日本人』(ふるかわ海事事務所, 2007), 131.
- 25 森崎和江「朝鮮断章・2—土堀—」〔初出『アジア女性交流史研究』No.4, 1969〕『ははのくにとの幻想婚』(現代思潮社, 1970), 233.
- 26 森崎和江「訪韓スケッチによせて—二つのことば二つのこころ(1)」〔『辺境』1, 1970〕『異族の原基』(大和書房, 1971)
- 27 前掲書, 14.
- 28 森崎「朝鮮断章・2—土堀—」, 233.
- 29 森崎庫次の履歴に関しては、『森崎和江コレクション——精神史の旅 5回帰』(藤原書店, 2009)の「森崎和江自選年譜」(345)を参考。
- 30 森崎『慶州は母の呼び声』, 165~166, 215を参考。
- 31 森崎和江は両親の森崎庫次と愛子は森崎の誕生一年前の1926年に大邱公立高等普通学校の江頭校長に招かれて朝鮮に渡り、庫次は歴史と地理を教えていたと書いている。しかし韓国側に残っている『職員録資料』で「森崎庫次」の名前を調べたら「調査時期」は「1925年」となっており、森崎和江が書いている時期と一年の相違がある。森崎和江『慶州は母の呼び声』, 42; 韓国史データベースの『職員録資料』(<http://db.history.go.kr/item/level.do?itemId=jw>)を参考。
- 32 山下達也、「植民地朝鮮における「内地人」教員の多様性—招聘教員と朝鮮で養成された教員の特徴とその関係」『日本の教育史学』50巻, 2007, 100.
- 33 森崎和江「『植民地』朝鮮に生まれて」、中島敦他著『コレクション戦争と文学17 帝国日本と朝鮮・樺太』月報16(集英社, 2012), 4.
- 34 秀峯學園五十年史編纂委員会『秀峯學園五十年史』, 1988。(ハングル)
- 35 前掲書, 128.
- 36 前掲書, 132. 原文は漢字交じりのハングル、翻訳は引用者によるものである。
- 37 前掲書, 160.
- 38 前掲書, 161.
- 39 その「自由」を愛の「自由」さにまで拡大しているところ「世間では赤いというけれど、それはすばらしいことなのだ。うまく説明できないけれども自由とはうちのおとうちゃんとおかあちゃんのようなことなんだ。金さんのおじちゃんとおばちゃんのようなことなんだ。先生は自由はよくないと言ったけれど、あの先生は恋人がいらっしやらないからそんなふうに言われるのだ。」(86)は今後の課題である。
- 40 金富子(2011)は、普通学校制度への考察を通してその制度に付着している「植民地性」に注目した。金富子『継続する植民地主義とジェンダー——「国民」概念・女性の身体・記憶と責任』世織書房, 2011, 46~50.
- 41 森崎和江「わたしのかお」〔『アジア女性交流史研究』No.3, 1968〕『ふるさと幻想』大和書房, 1977, 182.
- 42 森崎和江「土堀」〔『アジア女性交流史研究』No.4, 1969〕『ふるさと幻想』大和書房, 1977, 188~189.
- 43 森崎和江「民衆意識における朝鮮人と日本人」〔『現代の眼』, 1969〕『ははのくにとの幻想婚』(現代思潮社, 1970), 174.
- 44 同上.
- 45 森崎和江『闘いとエロス』(三一書房, 1970). 以下この著書からの引用は()の中に該当する頁数を入れることにする。

- 46 「室井があおい炎が立つ目でにらみすえた。わたしはイメージはあるけど具体案はない。朝鮮のうちなる朝鮮、あのきり立つように冷やかであったプライドと、わたしはいっしょにやりたいと思う。けれども、具体案をわたしはひとりで立てたくない。わたしの欲望を話し、それへ立ちむかう朝鮮を探して協力してやりたいのだ。同じやり方でこの筑豊の失業者にもふれたい……「あたしね、朝鮮を探してきます。きっとそうするから、そのとき、具体的なことをあなたもいっしょに考えてもらいたい……」森崎『闘いとエロス』, 310～311.

Abstract

Morisaki Kazue's experience in Korea and her father Morisaki Kuraji

MunHee Kang

This article focuses on the colonial experience of Morisaki Kazue(1927~), who was born and raised in Korea. I will consider the experience of Korea of Morisaki Kazue with father as an intermediary in re-capturing the historical background of Daegu and Gyeongju, which took place as a matter of course at that time, as "colonial rule" after the war. In the study of Morisaki Kazue up until now, she was positioned as 'the second colonist' and her experience was seen as a criticism of colonialism. In other studies, Morisaki Kazue's experience in Korea was interpreted as an opportunity for criticism of Japan after the war, but only mentioned that Morisaki's ideas and theories were formed through her experience in Korea and her father's influence. However, when Morisaki Kazue criticized modern Japan after the war, it was written as her father's story. Many of the articles on the visit to Korea written in the 1970s and on the Korean issue describe her father, Morisaki Kuraji, and what her father did before the war is recalled in the space-time space of the postwar period. Morisaki Kazue is forced to face her father. This is not a self-evident thing like 'sense of sin' but a question about what father did. Thinking about Morisaki's contradiction with her father as a person with contradiction in colonial Korea leads to the uniqueness of Morisaki's perception of colonial experience.

